デジタルカメラの持ち方

デジタルカメラで撮影するときは、しっかりとデジタルカメラを両手で持ちましょう。

デジタルカメラは手のひら全体を使ってしっかり持ちます。こうすることで、シャッターボタンを押す瞬間にデジタルカメラが動いてしまうのを防ぐことができます。

デジタルカメラを持つ場合は、次のような点に注意します。

●フラッシュやレンズに指が掛からないように持つ

●両手でしっかりと固定する

●デジタルカメラの付属品にストラップがある場合は落下防止のため利用する

●足を肩幅程度に開き、少し膝を曲げたり足を前後に開いたりして下半身を安定させる

写真撮影の3原則

失敗写真とはどのような写真のことでしょう。被写体にうまくピントが合っていないピンボケ写真や撮影時に手ぶれ（撮影者の手が動いてぶれてしまうこと）や被写体ぶれ（被写体が動いてぶれてしまうこと）で、いい表情が撮影できなかった写真、逆光で顔が暗くなってしまった写真などが失敗写真の例といえます。そのような失敗を防ぎ、上手に写真を撮影するには3つの原則があります。

●ピントを合わせる

●手ぶれを防ぐ

●光の向きを考える

ピント

上手に写真を撮影する1つ目の原則は、「被写体にピントを合わせること」です。

ほとんどのデジタルカメラには、オートフォーカス（AF）機能が搭載されており、自動的に画面の中心にあるもの、または手前にあるものにピントが合うようになっています。そのため、被写体が中心から外れていたり、後方にあったりする状態で撮影すると、ピンボケしやすくなります。

ピント合わせのコツは、シャッターボタンを途中まで軽く押す「半押し」です。シャッターボタンを半押しすると、合わせたピントを固定しておくことができます。半押しを覚えると、画面の端にピントを合わせた写真も撮れるようになります。

1　被写体を液晶画面の中心に合わせる

▼

2　シャッターボタンを途中まで軽く半押ししてピントを固定する

▼

3　デジタルカメラの向きをずらして構図を変える

▼

4　シャッターボタンをしっかり最後まで押す

手ぶれ

上手に写真を撮影する2つ目の原則は、「手ぶれを防ぐこと」です。

コンパクトデジタルカメラは、小さく、持ち運びに便利ですが、カメラが小さいため、シャッターを押すときにカメラが動いてしまい、写真がぶれてしまう「手ぶれ」が起こりやすくなります。

ほとんどのデジタルカメラには、この手ぶれを軽減する機能が付いているので、この機能を設定しておくとよいでしょう。

光の向き

上手に写真を撮影する3つ目の原則は、「光の向きを考えること」です。

光の向きには次のようなものがあります。

●順光

被写体の正面から光が当たる状態です。正面から全体に光を当てることで被写体に影ができにくくなりますが、質感を出しにくいため単調な写真になることもあります。

●サイド光

被写体の左右から光が当たる状態です。被写体の輪郭や質感を強調することができますが、明暗差のはっきりした影ができるため、きつい感じの写真になることもあります。

●逆光

被写体の背中から光が当たる状態です。被写体の正面が影になるため暗くなりますが、被写体をシルエットとして浮き立たせる効果もあります。

デジタルカメラの機能

フラッシュ機能

ほとんどのデジタルカメラには光を補うための「フラッシュ」が付いています。逆光や日陰で撮影するときなど、被写体に光が足りないときにとても役に立つ機能です。

ただし、撮影するシーンによっては、光が被写体に当たる質感を大切にしたい場合などもあります。その場合は、フラッシュを発光禁止にして撮影します。

ズーム機能

遠くの被写体を大きく撮影したり、広い範囲を撮影したりする場合に「ズーム」機能を使います。野球やサッカー観戦など、離れた場所から被写体を大きく撮影したいときや、逆に景色全体を撮影したいときなどに便利な機能です。

ズームには「広角」と「望遠」があります。広角は、被写体を縮小して広い範囲を撮影することで、「ズームアウト」または「ワイド」ともいいます。望遠は、被写体を拡大して撮影することで、「ズームイン」または「テレ」ともいいます。

赤目軽減機能

フラッシュを使って撮影すると、人や動物の目が赤く写ってしまうことがあります。この現象を「赤目」といいます。

人や動物の目は、明るい場所では瞳孔（黒目の中心部分）が小さくなり、暗い場所では大きく広がって、目に入ってくる光を調節しています。暗い場所で瞳孔が大きく広がっているときに、フラッシュの光が目に入ると、瞳孔の奥にある網膜の血管が映ることになり、赤目現象が起こります。

デジタルカメラには、この赤目を軽減する機能が付いています。この赤目軽減機能では、暗い場所で撮影するとき、まずフラッシュを発光させて目を明るさに慣らして瞳孔を小さくさせます。その後、再度フラッシュを発光して撮影します。

露出補正

日中の景色を撮影するときなどに背景が明るかったり、白っぽかったりすると、デジタルカメラが自動的に写真全体を暗く補正してしまい、暗い写真になってしまうことがあります。反対に、背景の色が濃い場合などは、写真全体が明るく補正されてしまうことがあります。

背景と被写体の明るさの差が大きい場合には、「露出補正」を使って、写真全体の明るさを手動で調整できます。

露出補正の数値を上げると写真は明るくなり、数値を下げると写真は暗くなります。ただし、露出補正の数値を上げて撮影する場合は、手ぶれが起きやすいので三脚を使うなどしてしっかり固定して撮影するとよいでしょう。

マクロ機能

花や昆虫や鳥など小さい被写体を撮影する場合に、できるだけ近づいて大きく撮影したり、部分的に拡大して撮影したりすることがあります。しかし、被写体にデジタルカメラを近づけすぎると、ピントが合わずに被写体がぼけてしまいます。これは、レンズに「最短撮影距離」があり、この距離より近い位置から撮影しようとすると起こる現象です。このような場合は、「マクロ（接写撮影）」機能を使うと、接写撮影してもピントが合って、きれいに撮影できます。

夜景モード

光輝くきれいな夜景を撮影したのに、撮影結果を見ると、全体的に暗くなってしまって光が見えないということがあります。

夜景を撮影したいときは、「夜景モード」を利用しましょう。夜景モードでは、あらかじめシーンに合わせた設定が登録されています。ただし、夜景を撮影するには、カメラをしっかりと固定した状態で撮影する必要があるので、三脚などを利用するようにしましょう。

また、光を補うためのフラッシュは、夜景撮影の場合は反対に光を打ち消してしまいます。フラッシュは発光禁止にして撮影しましょう。